

「ガラパゴス」、ここに極まれり！

山道弘敬の

本質から

目を

逸らすな

TOMTENグループ 代表取締役 山道弘敬

1955年、北海道苫小牧市生まれ。北海道大学農学部農工学科卒業。食品加工メーカーなどを経て、2004年に(有)TOMTENを設立。その後、株式会社化し、農産物の乾燥・貯蔵・鮮度保持を中心に事業を展開している。13年から大型鉄製コンテナに入れたタマネギを大量に施設乾燥させるアスレーションシステムの提供を始めた。一方、ポテトニュースジャパンウェブサイト (<http://www.potatonews.jp/>) を運営するPotato News Japan(有)の代表編集委員も務め、農業ジャーナリストとしての側面も持つ。北海道帯広市在住。

2014年、筆者はカナダのノバスコシア州のアップルバレーのホテルで開かれていたカナダで最も古い140年もの歴史を誇るリング生産者組合の会合に出席していた。事の経過は以下の如くであった。当時筆者は、とあるリング加工会社の原料貯蔵改善のために奔走していた。きっかけは東京の展示会に出展していたときにお客から提案を受けたことによる。その会社は秋田県と青森県の県境に位置する鹿角市に工場を擁しており、話を聞けば聞くほどとても惜しい農産加工場であった。国内のリングを加工してペストリー用のアップルパイを作る工場であり、国内シェアはナンバーワン、取引先は製パン大手やコンビニ大手など一流どころで占められていた。にもかかわらず、経営上は大きな問題を抱えていた。曰く、必要なリング原料について、毎年いくらか入手できるのか、どれくらい量が確保できるのか、いつから調達できるのか、まったく見通しが立たないという。そのため、毎年工場の無稼働期間が3カ月ほどあり、従業員はそのつど解雇されて原料のない夏場は失業手当で暮らしているという。

なぜこのようなことになるのか。背景には日本の農業における「加工」というものに対する中途半端な取り

組みがある。日本の農業では加工で使用する原料は生食向けに販売できないいわゆる「すそ物」と決まっていた。ご多分に漏れず、このリング加工会社もそのすそ物原料の調達・加工を基本としていた。秋になってリングが収穫され始めても、この工場では原料が手に入らない。なぜなら、農家は安くして金にならない「すそ物りんご」をあえて収穫しようとしなからだという。リングの収穫が終わって倉庫に収穫されたリングが納められ、その選別・出荷が始まって初めてすそ物が発生する。そこからやっと原料の調達が始まるという。ここには、ブローカーも暗躍して値段の駆け引きがあり、量も時期も値段も毎年見通しがまったく立たないというわけだ。

ところで、筆者はこの顧客との関係もあり、このころ海外のリング栽培はどのようになっているのか興味を持ち、いろいろと調査していた。そして、気がついたのは日本のリング栽培の収量の低さであった。米国西海岸に位置するワシントン州はこの国最大のリングの産地であるが、その統計を見ると2000年代に入って10a当たり4tを超えている。一方、日本のリング農家に収量を尋ねると10a当たり2t程度だという。筆者は本当に米国のリング栽培

では日本の収量の2倍も採るのだからかと疑問に思い、かねてより交流のあったカナダの研究者にメールで尋ねてみた。その研究所は先に触れたアップルバレーという町にあり、カナダでも歴史の古い果樹研究の中心であった。そこでリングのCA貯蔵の研究を長年続けて特許まで取得していたロバート・プランジ博士は筆者にノバスコシア州のリング栽培指導書を送ってくれた。そこには2倍とは言わないが、10a当たり3・5tを目標とする栽培体系が記されていた。あれやこれやと何度も質問を繰り返す筆者に煩わしさを感じたのか、プランジ博士はリング生産組合の会合が年明けの1月に開催されるので、そこに参加して疑問を解消する機会としてはどうかと誘ってくれた。それで筆者はそこに参加することになったわけである。

リング生産組合の組合長は筆者を自らの畑に案内し、リングの栽培技術の変遷を自分の畑で示してくれた。古い畑は木が大きく、10a当たりの株数が少なく、新しい畑ほど木は小さく、10a当たりの株数が多い。新しい経済的な農家ほど、後者の栽培方法に移行しているという。日本では大きな木を育てて果実を着けさせるという古い時代の考え方に固執しているなかで、世界のリング栽培

の主流は木や幹が育つ栄養生長時期を生理的に早く脱出させ、生殖生長に移行させて早く果実を着けさせるという栽培方法にシフトしていた。驚くべきことに、組合長の次に訪問した若手のリンゴ栽培農家はリンゴの苗を移植したその翌年から収穫を開始し、4年目には最大収量に達してその後20年間は収穫を続けるという。ちなみに、リンゴ栽培組合の組合長がこれまで記録した最大収量は10 a当たり6・6 tということだった。

筆者はますます世界のリンゴ栽培がどうなっているのかを知りたくなり、オランダを訪れた際に、取引先の社長にリンゴ農家に連れて行ってほしいと頼んだ。すぐさま収量について尋ねたところ、答えは10 a当たり7・7 t、絶句してしまった。

日本に戻った筆者はこのリンゴ加工会社を救い、北海道のリンゴ栽培の復興に一石を投じるために北海道庁の職員とこの加工会社の社員と一緒に北海道のとあるリンゴ生産組合を訪れた。世界のリンゴ栽培では日本と大きな収量差があること、新しい栽培方法を取り入れて加工リンゴ栽培に徹すれば、安定した収入が得られることなどを説明したが、この組合長は「30年間リンゴを栽培してきたが、自分は2 t以上採ったこ

とがない。そんな話は信じられない」と聞く耳をまったく持たなかった。道の職員ともこんなのを相手にしていても始まらないという点で意見が一致するという情けない話であった。ちなみに、北海道では往時にリンゴ栽培面積が5000 ha以上あり、青森を抜いて全国一であった時代もあったが、今日では500 haを切って市場に流通することも珍しくなっている。

件のリンゴ加工会社は原料が潤沢に調達できるのならば、工場進出すら考えるところであった。市場から信頼を失った北海道の果樹地帯で加工用専用リンゴを生産すれば、この会社が購入している価格から判断し、はるかに優良な農業経営が可能であることが明らかであり、今日であつても有望な企画であると考えている。誠に悔しい話である。

さて、このような話は他にも枚挙にいとまがない。筆者の主戦場である馬鈴薯栽培でも先日、「オランダの馬鈴薯の収量が一目高いように見えるのは、オランダの収量統計が規格外もすべて含めての収量であるから」というような話を耳にした。筆者の手元にはオランダの農業研究の中心ヴァーヘニンゲン大学の学生がまとめた、ある馬鈴薯農家の収量調査についての報告書がある。その農

家は500 haで馬鈴薯を栽培しており、その畑は大小30カ所に及ぶという。その畑ごとに大きな収量差があり、収量の高い畑では10 a当たり8 t、収量の低い畑では10 a当たり4 t以下という。平均は5〜6 tのところにある。学生の課題はなぜこのような大きな収量差があるのかという点に主眼があるが、筆者にとつては馬鈴薯が8 tも採れるのかという驚きのほうが強かった。8 tも採って、それが規格外を含めたために収量が高く見えたはずもなからう。この農家がオランダの農家の平均ではないかもしれないが、可能性を示すうえでは十分である。

振り返って筆者が専門としている貯蔵庫についても調べれば調べるほど日本の異常さに気がつく。建設コストはEUの4〜5倍、中国の20倍、冷凍機の値段も3倍、選別機なども欧米の2〜3倍、このようなコストの差異は一体どこから生じるのだろうか。日本を自虐的に表現する「ガラパゴス」国家もここで極まれりという状態である。

近年は飛行機の搭乗券も安くなり、気軽に海外に視察に出かけられる時代になった。しかし、それだからこそなお悪いと筆者はときどき考える。1週間や10日程度の海外農業視察を行なったところで何がわかる

のであろうか。

筆者はオランダの会社との取引開始が契機となって起業した関係から、頻繁に海外を訪問し、日常的に海外の取引先との間で情報交換を繰り返している。ヨーロッパへの訪問回数はすでに50回を超え、それでも欧州農業の真髓に触れているのかどうか怪しくなる。ただ、明らかなのは日本の「ガラパゴス」状態がますますひどくなってきたことである。彼らが何十年もかけて到達したレベルに2〜3年で到達するというのは無理な話であろう。粘り強く情報を交換し、学び続ける姿勢を堅持せずに、いたずらに自己満足に浸っているようでは発展はおぼつかない。日本は遣唐使・遣隋使の時代からずっと海外から学び続け、それを基に発展してきたことを忘れるべきではない。コンピュータであれ、スマートフォンであれ、今日の我々の日常になくしてはならないものものすべてが日本発のものではない。航空券が安く手に入り、海外との情報交換がインターネットを通じてほとんどタダ同然の費用で得られる時代になってガラパゴス化する要因は、我々日本人の島国根性的な保守的思想ではないか。我々のガラパゴス性を率直に認めるところからすべては始まると言えなくもないであろう。